A BRAND NEW CHAPTER @KOCHI

TOSABUSHI

とさぶし

TAKE FREE

No 52

kochi 再発見 discovery 新発見

SUPER LOCAL 高知家

高知の喫茶は、自由だ!

アサヒルバン喫茶

高知の喫茶は、自由だ！

アサヒルバン喫茶

朝昼晩、それぞれの喫茶に高知が息づく

街が、人が、高知の自由な喫茶文化を育ててきた

人口千人あたりの喫茶店の数は、実は高知県が日本一。過去には、そんな調査結果（※）が出たこともあるほど、高知は、喫茶文化が根付いた場所。喫茶店の看板は、市街地や港町、山あいの集落などあらゆる場所に立っており、「ゆっくりしていかんかえ」と目にした人を誘っているようだ。

ではなぜ高知では喫茶文化が盛んなのだろう？　歴史をひも解いてみると、日本各地で喫茶店が増え始めたのは、戦後の昭和20～30年代のこと。開業のハードルが比較的低かった喫茶店は、当時の人々にとって貴重な選択肢だったのだろう。高知でも、夫婦や家族で営む個人店が次々と誕生し、中でも女性店主が一人で切り盛りする姿は、高知ならではの風景であった。新しいことを始める人を受け入れる県民性も追い風となり、商店街や駅前、町のあちこちに喫茶店が広がっていったのだ。

経済が発展していった昭和40年頃には、映画館の急増と結び付き、上映後に談笑するなど、喫茶店は「おしゃべり好き」といわれる高知人の憩いの場に。また、芸術家が集うサロンのような喫茶店も生まれたという。

ある喫茶店のマスターは、「昔の喫茶店はサラリーマンのおさぼりスポット。高知は女の人がよう働くき、男の人がさぼるがよ（笑）」と半ば冗談のように当時を振り返る。

自由気ままで、熱っぽく、話すことが大好き。そんな高知の人たちにとって喫茶という空間は、気軽な歓談に、熱い文化議論に、はたまた羽を伸ばすのに。自分たちが居心地の良い過ごし方を満喫するのにぴったりの場所だったのかもしれない。高知県民にとって喫茶店は、コーヒーを飲むだけでなく、人と人をつなぎ、日々の風景を彩り、家族の思い出を刻む場所。朝・昼・晩、いつ訪れても高知らしい風景が、喫茶店にある。

（※）総務省統計局や全日本コーヒー協会が過去に行った調査によるもの。

通い続けたい朝のひと時が喫茶店にある

喫茶アロエ（P07掲載）の常連
黒岩 喜佐子（くろいわ きさこ） さん

海を見ながらモーニング

黒岩さんご夫妻が「喫茶 アロエ」でモーニングを食べるのは、15年間変わらない毎朝の習慣。以前はマグロ漁師だったというご主人の敬典（けいすけ）さんが転職したことをきっかけに、夫婦でモーニングに通うように。今では、子ども

高知は喫茶店が人口あたりの数でいうとめちゃくちゃ多い！というのを聞いたことがあります。地元の方はどんなふうに楽しまれているかなどを知りたいです！（高知県・30代）はみだしコラム

バン喫茶

ジャズ喫茶 木馬（P14掲載）の常連

高橋（たかはし） 一世（かずよ） さん

一日を締めくくるひと時

「夜、音楽と本に囲まれたこの喫茶店で、お酒を嗜みながら過ごす時間が好き」と話す高橋さん。ジャズ喫茶「木馬」とは、25年前にライブを聴きに行って以来の付き合い。今では仕事が終わった後に訪れるのが日課となっている。お酒を味わいながら音楽を楽しんだり、本を読んだり、マスターや他のお客さんと会話を交わしたり。高橋さんにとってそのひと時は、一日を終えた自分へのご褒美であり、同時に公私を切り替えてくれる大切な時間でもある。

ヒル喫茶

エヴァンス（P09掲載）の常連

たっちゃん さん

喫茶は変わらない日常

まんが好きのたっちゃんは、店主の古くからの友人。定年で仕事を離れた今でも、週に一度は「エヴァンス」を訪れ、晩ごはんを兼ねた遅めのランチを楽しむ。勤め人だった頃は、仕事終わりに毎日のように訪れては、コーヒーを片手にまんがを読みふけった。そんな風に一人で過ごすこともあれば、仲間内で集まる場所としてもよく利用するのだとか。「ライフスタイルが変わっても、ここに来るのは日常やね」と話してくれた。

や孫と一緒に訪れることもあれば、誘った友人と連れ立ってやってくる日も週に何度かあるそう。喜佐子さんは「海を見ながらモーニングを食べる、この朝のひと時がたまらなく好きながよ。元気でいられるうちは通い続けたい」と微笑む。

はみだしコラム 久々に高知へ帰ってもいいかなと思えました！喫茶特集気になります。（京都府・20代）

自由な高知人は朝も自由!

朝じゃなくても モーニング

「時間スタイルを気にしない」おおらかさがここにある

喫茶店のモーニングといえば、開店からおおむね11時頃までが提供時間。だが高知では、ランチタイムが終わっても、午後3時のおやつの時間でも、さらには一日中モーニングを提供している店が珍しくない。そこで注目したのは睡眠時間。高知県民の平均睡眠時間は8時間4分で、これは全国第5位(※)。つまり、高知県民はよく寝ており、朝起きる時間が遅い? これに合わせて、モーニングの提供時間も長くなった…?

一方、喫茶店の答えは、「細かいことは気にせんきねえ」。「お客さんが喜んでくれたら、それでかまん!」。高知県民らしい自由でおおらか、おもてなし好きな人柄が、独自のモーニング文化にも表れているのかも。

(※)総務省統計局が行った「令和3年 社会生活基本調査」の結果によるもの。調査は5年ごとに実施されている。

手作りにこだわる喫茶の、手作りあんこが評判のモーニング。

1日中オーダー可能で小腹が空いた時にもぴったり。

「モーニングがぼっちり(※)」とランチで注文する人も多いんです。

(※)ちょうど良い、ぴったり

喫茶ノア

奈々(なな) さん

昭和51年創業 ●モーニング提供時間:7:30~15:00

ビジネス街である高知市知寄町にある「喫茶ノア」。かつては息つく暇もないほど忙しかったそうだが、モーニングの客がぱったり来なくなった時期があり「ほいたら、いっそ終日出してみようか」と始めたのが、今のスタイルの原点に。店主のお孫さんで、四代目にあたる奈々さんのSNSをみて、若者も多く訪れている。

創業当時は午前とアイドルタイムに提供していたモーニングだが、「昼も食べたい」という声があったり、また「正直、提供する時間を管理するのが面倒になったがよ(笑)」と、終日提供するように。昔は「ストロング」と呼ばれる深煎りの濃いコーヒーが人気で、今はさっぱりした浅煎りのコーヒーが人気だという。

昭和55年創業 ●モーニング提供時間:7:00~16:00

orion

永野恭子(ながのきょうこ) さん

時間を分けるのが面倒になっちゃって(笑)。

喫茶店のモーニングに行ってみたいから、オススメがあれば知りたい。(高知県・20代) はみだしコラム

店主の人生を語る華やかモーニング

舞夢喫茶店（まいむきっさてん）

平成8年創業

●モーニング提供時間：8:00〜15:30

高知のモーニングといえば、提供時間の長さだけでなく、そのボリューム感も特徴のひとつ。例えば、須崎市の「舞夢喫茶店」のモーニングは、お皿がトレーに収まりきらないほどの盛りっぷりだ。きっかけは、店主・廣部（ひろべ）まりこさん自身の人生にあるそうで、食へのこだわりが強い家庭に育ち、若い頃は大阪で暮らしながら各地の専門店を食べ歩いてグルメ研究に励んだという。故郷である須崎に戻り、「舞夢」を始める時、その経験がストレートに活きたそう。あふれんばかりにぎやかなモーニングには、高知人ならではの気前のよさと真心も添えられているのである。

トーストの下に隠れているのは…？食べてからのお楽しみ！

花時茶（はなどきちゃ）

夜まで頑張って働く人に食べてもらいたかったけん。

中山 環（なかやまたまき） さん

平成10年創業 ●モーニング提供時間：7:30〜14:00

宿毛市の「花時茶」が昼過ぎまでモーニングを提供し始めたきっかけは、ご主人の善仁（よしひと）さんが行きつけの夜の店で、「私たちは朝が遅いけん、モーニングは食べたことがない」と働く女の子が話していたから。せっかくならと、一時期はモーニングメニューが100種以上あったことも！（現在は56種類）

教えてくれたのは… 店長 中山 裕司（なかやま ゆうじ） さん

おにぎりや味噌汁にトーストという、和洋折衷のモーニングで知られる「喫茶デポー」。「街では夜間に働く人もいる。朝が何時までかは人それぞれ」と、約15年前から遅い時間までモーニングを提供している。夜勤明けの人にも、これから夜勤に向かう人にも。高知の夜を支える、心強い活力源だ。

昭和52年創業 ●モーニング提供時間：8:00〜15:00（12:00〜13:00を除く）

喫茶デポー

朝は人それぞれ。モーニングの時間も人それぞれ。

和食派も洋食派も満足すること間違いなしのモーニング。

石川 咲来（いしかわ さな） さん

はみだしコラム 子どもの頃、たまに食べに行く喫茶店のモーニングは特別感があってすごくワクワクしました。（高知県・30代）

川の景色もそっちのけ！

四万十町

穏やかな店主の人柄に地元の常連客が集う

四国山地の奥地から流れてくる梼原（ゆすはら）川が、雄大な四万十川に合流するまち、四万十町大正地域。川沿いにたたずむ「喫茶 橋」の窓辺のテーブル席からは、釣り客が清流に竿を向けるのどかな風景を眺めることができる。朝の憩いの時間、そんな景色をよそに、地元の常連客が腰掛けるのは、キッチンで仕事をしている店主にいちばん近いテーブル。「とみかさん！」と呼ばれるのは、店主の中平都美香（なかひらとみか）さんだ。「ここは地域の方々が集まってにぎわう交流の場。シーズンになると、夜のうちに火振り漁で取れたアユを持ってきてくださることもあるんですよ」。

喫茶 橋
●昭和56年創業

窓から望むのは、店名の由来でもある「大正橋」。かつてはこの橋のたもとに店を構えていたという。移転後も地元の人たちに愛され続けている。

室戸市

市の後押しもあり、国定公園内に開店した「アロエ」。その店名は、潮風の強い海辺でもたくましく育つアロエの花にちなんで名付けられたという。

地元住民の憩いの場であるなじみの喫茶店には、その土地ならではのひと時がある。川に、山に、海に。それぞれの「地」喫茶を訪ねてみた。

喫茶 ブルーメ
●昭和63年創業

海の漁師が今日も集う

日替わりランチには地元漁師が差し入れた鮮魚を

太平洋が目の前に広がる、室戸市元(もと)地区の「喫茶 アロエ」。店主の松島登世(まつしまとせ)さんは「地元で働きたい」と、21歳で入店。それ以来、30年にわたって店を支え続け、平成29年に店主を引き継いだ。長年の常連客には、すぐそばの「行当(ぎょうとう)漁港」のサンゴ漁師をはじめ、サバやアジ、イサキなど、取れたての鮮魚を持ってきてくれる地元の漁師たちの姿も。元サンゴ漁師という松島さんのご主人も、自ら釣ったカマスを差し入れ。それらの鮮魚は、日替わりランチとして提供されることもあるのだとか。

喫茶 アロエ
●昭和55年創業

朝も昼も夜も、高知の暮らしに欠かせない「生活の一部」「地」喫茶の一日

山あいに温かい灯り

山間部の住民たちが集う大切な憩いの場

高知市を起点に山あいを抜けて愛媛県へとつながる、国道197号沿いの「喫茶 ブルーメ」。店主の西森由美(にしもりゆみ)さんは、義母からこの店を引き継いで今年で5年目。常連さんが集まるテーブルを見て「今日はあの人来んねえ、あとで連絡してみようか」と笑う。日中は、作業員や運転手たちがひと息つく休憩どころとしてにぎわうが、夜になると「これからみんなで行ってもえいろうか?」と、地元の人から電話が入ることも。常連さんたちの二次会のために、21時から店を開けることもあるという。真っ暗な山あいに、喫茶の灯りが和やかにともっている。

津野町

朝、それぞれに店へやってきた常連客たちが、ひとつのテーブルに集まってモーニングを味わうことも、この店に広がるいつもの光景だ。

はみだしコラム 路面電車の終着駅にあった喫茶店が、旅の思い出として印象に残っています。(大阪府・40代)

まんがと共に時を刻む喫茶文化

高知式まんがと喫茶

まんがを置く高知の喫茶には、長時間の滞在を気にしない店主の優しさや、まんが愛に根ざした文化が息づいている。どうして高知の喫茶にはまんがが多いのか？その理由を探してきた。

あるぺんはうす（昭和54年創業）

愛され続ける老舗喫茶

その理由はまんがの棚にも

高知市薊野（あぞうの）西町の「あるぺんはうす」。照明がほのかに灯る落ち着いた店内には、まんがぎっしり詰まった本棚がある。店主の松木智（まつぎとも）さんは「子どもの頃から少年まんがが大好きな息子が集めたコミックスや、近所の喫茶店の女性店主が持ってきてくれるミステリー、怪談ものなんかが多いんじゃないかね」と言う。コーヒーと思い思いのまんがをお供に長居するお客さんも少なくないそうで、「回転率」という言葉とは無縁の店だ。「朝から晩まで、一日中お店で過ごされるお客さんもいますし、小さい頃から毎日のように来てくれる女子高生の子には、単行本の続きの巻を貸してあげることもありますよ。ゆっくり好きな過ごし方をしてくれたら、それでいいんです」。高知の喫茶店に見られる、本がぎっしり詰まったまんが棚は、店主たちの「自由にどうぞ」という寛容さの表れなのかもしれない。

棚にはいろいろな種類のまんがが並ぶ。複数冊を席に持ち込み、じっくりと読みふける人も多い。

漫画編集者も注目する高知の喫茶

できれば書店に足を運んでいただきひとり一冊買って欲しいところですが（笑）、ネットで自由にコミックスが読める時代ですから、そんな建前論を言うつもりはありません。でも例えば、喫茶店で自分が生まれる前に大ヒットしたまんが作品を読んで、新たなファンになる若者だっているかもしれない。コミックスとの新しい出会いの場としてまんがが読める喫茶店が高知にはまだたくさんあるということは、編集者としても嬉しいですし、読者としても幸せなことだと思います。

小学館 ビッグコミックオリジナル 編集部 副編集長
小田（おだ） 基行（もとゆき） さん

愛媛は個人経営の喫茶店をもうほとんど見かけなくなりましたが、高知はまだ面白い個人の喫茶店がありそうなので楽しみにしてます。（愛媛県・50代） はみだしコラム

まんがを手にテーブルへ
今も昔も「当たり前」の光景

高知市ツ橋町の落ち着いた住宅街に店を構える「エヴァンス」。「僕が学生だった頃、街にはたくさんの喫茶店があって、どこもまんがを置いているのが当たり前。だから、自分が喫茶店を開くことになった時も、まんがを置くのはごく自然なことでしたね」と話すのは、店主の山本さん。店に置くまんがは、知り合いが読み終わったものや、新しく入った若いアルバイトスタッフが選んだものなど。気付けば、個人的な好みも誰もが知るヒット作もごちゃまぜの、にぎやかなまんが棚になっていたそう。学生時代、山本さんが放課後に立ち寄った喫茶店で、まんがを読んで仲間と語らった当時の自由な空気は、今も変わらず息づいている。

エヴァンス（昭和62年創業）

店主
やまもと まさひろ
山本 真敬さん

昔から喫茶店が好き。「期待を裏切らない」を心がけて、毎日お客さんと接している。

イチオシまんがはコレ！

賭博黙示録カイジ

賭博をめぐるスリル満点の展開に引き込まれ、読み終えた後の爽快感がたまらないんです。

作者／福本伸行　出版社／講談社

気軽な読み物だからこそ
まんがは喫茶にふさわしい

幹線道路として多くの車が行き交う南国バイパス沿いの「西山珈琲館」。店内には約2160冊ものまんがの単行本がある。集めたのは、店主の西山さんだ。「まんがは気軽な読み物だから、喫茶店でくつろいでもらうのに、うってつけだと思って」。もちろん自身もまんが好きで、昔は県外の古本屋を巡って集めたそう。最近も、お客さんの声を受けて、まんがの棚を2つ増やしたという。「警察官に、ラーメン店に、古書屋に…、実はいろいろな仕事を経験して、この喫茶店を営んでいます。まんがは、主人公の生き方やものの見方に触れることができるもの。自分の人生を振り返るきっかけにもなりますね」と西山さん。喫茶店は、そんなひと時を過ごす場所にもなっている。

西山珈琲館（平成30年創業）

店主
にしやま まなぶ
西山 学さん

同地で20年にわたってネットカフェを経営し、「西山珈琲館」をオープン。シェフとしても30年以上の経験がある。

イチオシまんがはコレ！

黄昏流星群

短編作品集なので、いろいろな主人公に触れながら、さまざまな人生を感じられますね。気軽に読めるのもオススメです。

©弘兼憲史／小学館

はみだしコラム　モーニングを食べによく喫茶にいってました。（高知県・30代）

駅近くの「待ち」喫茶

列車を待つ時間も、喫茶店に入れば、旅のひと時になる。その街ならではの喫茶店の「待ち時間」は、どんなふうに流れているのだろう。

珈琲館 どなあ（昭和55年創業）

JR窪川駅から徒歩2分

四万十町生まれ。一期一会を大切に訪れた人をおもてなし。愛犬はこはるくん。

店主 浜口千賀子（はまぐち ちかこ）さん

窪川らしいお接待とおせっかいは やっぱり老舗喫茶にも

窪川駅から歩いてすぐの街角にある「どなあ」。本格的な自家焙煎のコーヒーはもちろん、店主・浜口さんの気さくな人柄でも愛されている。鉄道やバスの待ち時間に訪れる観光客も多く、そんなときは浜口さん自ら観光案内をしたり、お店で荷物を預かったり。深夜バスまでの時間をもてあましていたお客さんを誘って、一緒に夕食を楽しんだこともあるそう。「窪川のお接待文化が、自分にも根付いているんでしょうね」と笑顔で話してくれた。

喫茶 みつや（昭和32年創業）

JR須崎駅から徒歩5分

須崎市生まれ。「母が営む喫茶店を途絶えさせまい」と、40代で二代目店主に。

店主 高橋一泰（たかはし かずやす）さん

出発までの豊かな時間 コーヒーと笑い声とともに

「私がこの店を継いだ昭和60年頃、街には映画館や喫茶店がたくさんあって、駅前も人通りが多かったですね」と振り返るのは、「みつや」の店主・高橋さん。当時の店内には、鉄道を待つ人はもちろん、港町である須崎らしく、近隣の港から巡航船で来たお客さんの姿も多かったそう。出発までのひと時を過ごす、にぎやかな笑い声であふれていたという。そんな昭和の時代も感じられるレトロな雰囲気を求め、現在は観光客も「みつや」に足を運んでいる。

若い頃はおしゃれなカフェが好きでしたが、今は老舗の喫茶店が落ち着きます。（香川県・40代） はみだしコラム

喫茶と常連さん

～おやつをめぐって～

喫茶店と切っても切れないのが、常連さんの存在。いつもの時間に、どんな物語が紡がれているのだろう。愛されスイーツから、その一端を探ってみた。

喫茶オレンジの
ホットケーキ

店主
伊藤（いとう） 加奈美（かなみ）さん

奈良県生まれ。平成28年に高知市へ移住し、夢だった「昔ながらの喫茶店」をオープンした。

看板ホットケーキが会話をきっかけにさらににぎやかに

令和5年にオープンしたばかりでありながら、どこか懐かしい昭和の情緒が漂う「喫茶オレンジ」の看板メニューは、店名の焼印が目を引くシンプルなホットケーキ。多くのファンに愛されるこのホットケーキで、店主の伊藤さんが思い浮かべるのは、毎月欠かさず通ってくれるという70代の紳士だ。「焼印のおこげの部分が好きながよ」の一言から、その方には焼印を3つ入れて提供するようになったという。そのやりとりは、いかにも自由な喫茶らしい。

1970年代を意識した、昭和レトロでポップな店内。レコードプレイヤーで音楽を流すことも。

喫茶ウオッチの
焦がしキャラメルのプリン

常連客の注文が自信に
歴史ある地元喫茶の挑戦

「ウオッチ」は、創業から半世紀を超える四万十市の老舗喫茶。この店で新たな看板メニューとなっているのが、こちらのプリン。縁あって大阪の名店喫茶からレシピを受け継いだという。ある女性の常連客もすっかりこのプリンのとりこになり、訪れるたびに必ず注文してくれるそう。「実は、ウオッチにはこれまでプリンがなかったんですよ」と話すのは、店主の篠川さん。長年の常連さんが注文してくれることが、大きな自信になっている。

一條神社や天神橋商店街など、中村らしい名所もすぐそこ。散策したら、老舗喫茶でほっとひと息。

店主
篠川（しのかわ） ひとみさん

四万十市生まれ。奈良県からUターンし、家業である「喫茶ウオッチ」で働き始めた。

はみだしコラム　祖父母と一緒に通った喫茶店、今は記憶と過ごす静かな席。（高知県・20代）

昭和の名店

「土佐の台所」とも呼ばれてきた、高知市の大橋通り西詰めに並ぶ、2つの老舗喫茶店。県内でも特に人通りが多い繁華街で隣同士、昭和からお店を営み続ける両店に、それぞれの思いを聞いた。

昭和39年創業 メフィストフェレス

昭和の中頃、高知の街に喫茶店が次々と誕生していた時代。帯屋町に「喫茶 現代」（のちに「メフィストフェレス」に改称。「現代企業社」運営）がオープンし、数年後にはその南隣で「SPOON」が喫茶営業を始めた。当時、この界隈には「泉」「ローズ」「ロロ」といった喫茶店が立ち並び、商店街の映画館「日活モデル劇場」や「大劇」の周りにも多くの喫茶店があり、街はにぎわいに包まれていた。

しかし時代は移り変わる。自家用車の普及で人々の流れは郊外へと移り、50年代には缶コーヒーやホット飲料の自販機が登場。その後はコンビニの展開やコーヒーチェーンの台頭もあり、かつて高知市内で950軒以上、商店街周辺だけでも300軒ほどあったといわれる喫茶店も、時代の流れとともに減少していった。近年ではコロナ禍や物価高、人手不足が追い打ちをかけ、喫茶店にとって厳しい時代が続いている。

そんな中でも独自のスタイルを貫き、今もなお多くの人を惹きつけるのが「メフィストフェレス」と「SPOON」だ。↖

喫茶全盛の昭和から今へ 帯屋町に残る二つの名店

大西（おおにし） みちるさん

高知市出身。28歳の時に東京からUターン。家業である「現代企業社」に入り、現在は副社長として多店舗の経営に携わる。

高知市内のメフィストフェレスは昭和レトロな感じの落ち着くお店でした。（広島県・50代）

隣同士でどう違う？ それぞれのアサヒルバン

芸術を愛する文化交流の場

21時まで開いており、夜喫茶つかいもできるメフィストフェレスだが、2階は大きなスクリーンに音響設備を整えたミニ劇場、3階にはグランドピアノまで備えたイベントスペースも構えており、映画の上映会や音楽発表の場としても活用されている。「かつて高知の市街地では映画館の周りに喫茶店が増えていった」と言われているが、ここでは喫茶と劇場が同じ場所にあり、芸術文化の発展の地として、高知の文化を支えている。

昭和46年創業

SPOON

「競合ではなく共存」ともに時代を生き抜いてきた

となり合う

↙前者を運営する「現代企業社」は、美術作家である大西清澄（きよずみ）さんが創業し、県内で喫茶店やレストランを展開している。アートな空間づくりを大切にし、その雰囲気や居心地の良さから多くの人が足を運ぶ。一方「SPOON」は、中田麻紗子さんの祖父が営んだ「大代（おおだい）パン」を原点に、母・節子（せつこ）さんが喫茶営業を始め、そして麻紗子さんへと世代を超えて受け継がれてきた。家族の手で守られ続けてきた、喫茶らしい温もりが常連客に親しまれている。

世代を超え、感性を重ねて隣り合う喫茶店が紡ぐ時間

外観や空間づくり、音楽やアートを大切にする姿勢など、どこか共鳴する両店。しかしそれは互いに意識した結果ではなく、時代の移り変わりの中で挑戦を重ねた末にたどり着いた自然な形だ。「うちは大きな背中にそっと寄り添っている感じですね」と麻紗子さんは笑う。大西さんは「昭和の名店はいろいろあったけど、パワーアップして令和でも頑張っている。それがたまたま隣り同士だったということだと思います」と語ってくれた。

中田 麻紗子（なかた まさこ）さん

高知市出身。服飾関係の仕事に勤めたのち家業に入り、現在は喫茶SPOONを運営する「有限会社大代商会スプーン」の代表取締役社長を務める。

朝から夕方までフル回転で！

SPOONでは、早朝から常連さんがいつものモーニングを味わいに、ランチ時は2階の奥の席まで埋まり、昼下がりになると、プリンやパフェなどのスイーツを求める若者の姿が。さらに週末には、開店待ちの列ができることもあるそうで、「朝早くから高知観光をされている方をおもてなししなくては」と張り切るのだとか。休む間もなく営業した後は「夜はメフィストさん、お願いします」という気持ちです」と微笑んでくれた。

はみだしコラム　今産休中で喫茶店などゆっくり出来る場所を探していたのでちょうど良かった。（高知県・30代）

今夜もほろ酔い、まだ帰らん。

わたしたちの『寝る前』喫茶

音楽に読書におしゃべりに。人と文化をつなぐ、高知の夜の喫茶店。自由であたたかな土佐の気風が、ここにも息づいている。

グレオール

夜の喫茶店らしい落ちついた空間を生み出しているのは、コーヒーや料理の香りに、音楽と本、そして、おのおのに自分らしいひと時を過ごす、リラックスしたお客さんたちだ。

高知の夜喫茶には音楽や文学のカルチャーとここにしかない心地よさがある

夜の繁華街でも目を引くどこか懐かしい雰囲気の喫茶店。洩れ聞こえる音楽や、やわらかな灯りが心地よく、「賑やかな酒の街」という印象が強い夜の高知でも、遅くまでやっている喫茶店は、カルチャーと自分らしい時間を楽しむ〝文化的な空間〟として、長年、高知の人々に愛されてきた。「いつも決まった時間に訪れるお客さんが多いんです」と語るのは、ジャズ喫茶「木馬」の現店主・吉川里香（よしかわりか）さん。昭和38年、ジャズ喫茶ブームの真っ只中に誕生した木馬には、昔から通い続けているなじみの常連客も多い。中には仕事前に必ず立ち寄って気分転換をしていく近隣のバーのマスターや、仕事帰りに立ち寄って酒と本を楽しんでいく人など、1日のルーティンに「夜の喫茶店」を組み込んでいる人も少なくない。人々の心を満たせる場所として〝心地よさ〟を提供し続けてくれているのも夜喫茶の魅力と言えるだろう。

平日休みが多いので、落ち着ける平日の昼に喫茶店に行くのが好きです。（高知県・40代）

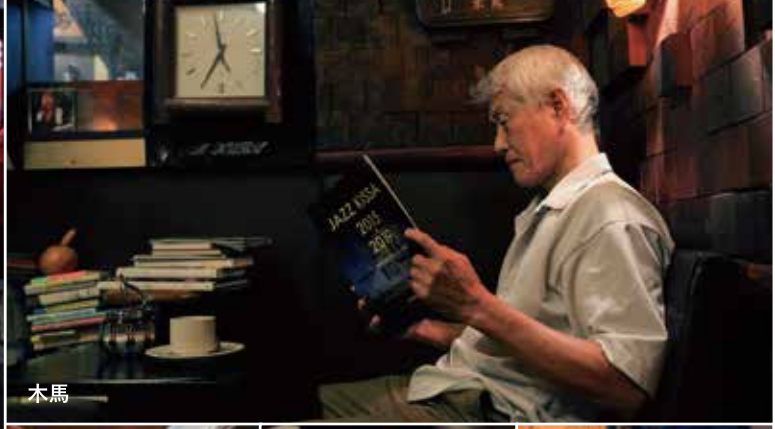
はみだしコラム

高知の夜に「甘い選択肢」が増えている

お酒を飲んだ後は甘いものが恋しくなる。実はこれ、アルコールの分解で体内の糖分が使われることから、血糖値を補おうとしている働きなんだとか。そのせいか、お酒の愛好家が多い高知では、「飲み会後は甘いもので締める!」という声も多く、それを受けて近年、夜にケーキやパフェなどのスイーツを提供する喫茶店が増えているという。

訪ねたのは、高知市の繁華街にある「Maison de Sweets Hattori帯屋町店」。「大人を喜ばせるケーキ」をコンセプトに、パティシエの服部伸也(はっとりしんや)さんが手がける本格スイーツが人気で、お酒を飲んだ後に夜喫茶を楽しむ人はもちろん、次のお店への手土産にケーキを購入していく人の姿も。「夜でもホールケーキがどんどん売れるんですよ」と服部さん。高知の夜に新しい甘味を楽しむ文化が生まれている!?

木馬



木馬

カフェ・ド・梵

クレオール

クレオール

カフェ・ド・梵

木馬

クレオール

「カフェ・ド・梵」(写真左下)には、お酒を飲んだ後に名物のシフォンケーキを味わいにくる、女性客の姿が目立つ。オーナーの細川さんは「夜喫茶のオーナーは、自分も喫茶好きという人が特に多いね」と教えてくれた。

カルチャーとコミュニティを求めて夜喫茶に人が集まる

夜の喫茶店は、音楽に映画、小説やまんがなど、カルチャーを愛する人たちが自然と集まり、語らう場所となっている。お店を営むマスターたちも文化人であり、出版社で働いていたオーナーが営むカフェ「クレオール」では、文学や音楽の話に、他のお客さんやマスターが加わって知り合いの輪が広がっていく、といった、おしゃべりとお酒が好きな高知県民らしい光景もよく見られる。また、そんな輪は、実は夜の喫茶店のオーナー同士にも存在していて、木馬のオーナー・吉川さんも、休日はクレオールを訪れて、音楽や書籍、映画についてよく語り合っているそう。そんな人たちが営む空間だからこそ、サロンのような居心地の良さが生まれ、自然と人が集まってくるのだろう。

はみだしコラム 高知は喫茶店がたくさん残っているのが羨ましい。(愛媛県・50代)

「ラ・メール ルネ」の「ルネ」は再オープンの際に島本さんが付けたもの。フランス語で「生まれかわる」という意味。

実はコーヒーが苦手だったという山中さん。島本さんのコーヒーを飲んでから初めて美味しいと感じ、それ以来飲めるように。

憧れのバトン

今回の関係

新店主 × 前店主

「ラ・メールを残したい」人の思いに動かされ継承を決意

昭和38年に創業した老舗喫茶「ラ・メール」は、地元の常連はもちろん、県外客や著名人にもファンが多い名店だ。現在、その店を切り盛りしているのが現店主の山中香さんである。

実は「ラ・メール」は一度、存続の危機に直面したことがある。閉店の知らせが広まった際、「このまま無(の)うなってしまうのは寂しいき、継いでくれんか?」と常連客たちからお願いを受けたのが、当時同じビルで飲食店を営んでいた香さんの夫・章弘(あきひろ)さん。別の事業も抱えていた夫から相談を受けた香さんは、常連客の熱い思いを知り「もし良ければ、私がこのお店をやってみたいのですが」と前店主・島本さんに申し出た。それから数ヶ月の特訓を経て、令和2年5月に「ラ・メール ルネ」として再出発を果たす。常連客からの「ラ・メールは高知の文化やき」という言葉に深く共感し、メニューをはじめ店の佇まいや空気感をそのままの形で受け継いだという。

香さんは「島本さんと出会えたことは私にとって大きな財産。これからもラ・メールの歴史をつないでいきたい」と語ってくれた。

ラ・メール 新店主

山中 香(やまなかかおり)さん

昭和63年生まれ、高知市出身。神戸の短大、就職を経て平成22年にUターン。令和2年より「ラ・メール ルネ」の店主として奮闘している。

はみだしコラム

地元の方の写真が大きいので(憧れのバトンとか)、すごく親近感を感じますね。(高知県・50代)

数多くのファンを持つお店の代表作「あんぱんとイタリアのハーフセット」。こだわりのあんこは今でも島本さんが炊いている。

作る人、伝える人、つなぐ人、遺す人…
ここ高知で、そんな仕事や活動をしている人と
その人がリスペクトする人にスポットを当て
2人の関係性、双方の思い、そしてこれからのことなど
胸に秘めたる熱い思いをひもといていく

一度は途絶えかけた店の歴史
常連客の思いがつないだ縁

「ラ・メール」を創業から切り盛りしてきたのは、島本昌城さん・美恵（みえ）さん夫妻。昭和37年に結婚した2人は、生活のために店をやろうと考えていた。もともと夫婦で喫茶店を巡るのが好きだったことから、翌年に喫茶店をオープン。以来、夫婦二人三脚で店を営んできた。

しかし令和2年に美恵さんが逝去。長年連れ添った妻を亡くしたことで無気力状態となった島本さんは、店を畳む決意をしていた。そんな折に現れたのが、現店主の山中香さんである。当初島本さんには店を継承させる気持ちは無く「喫茶店は儲からんし、しんどいきやめた方がいい」と一度は断ったという。それでも「やってみたいです」という山中さんの思いと、常連客の後押しもあり「じゃあ…やってみようか」と特訓が始まった。効率よく作業する山中さんの姿を見て、「この人になら店を任せても大丈夫だ」と感じたという。

再オープンから5年。今でも水曜と日曜には店頭に立ち、山中さんを支えている島本さん。訪れるお客さんには「こちらが今の店主の山中さんです」と誇らしげに紹介している。

ラ・メール 前店主
島本（しまもと） 昌城（まさき）さん
昭和12年生まれ、東洋町出身。昭和38年に追手筋に「ラ・メール」をオープン。その後、昭和43年に帯屋町へ移転。令和2年にお店を継承させ、現在も週2日は店頭に立つ。

店を愛する常連客の思いからつながった2人の縁。互いを尊重しながら学び合える、良い関係を築いている。

はみだしコラム 興味深い記事がたくさん載っていて面白かったです。
これからも読み続けたいと思いました。（愛知県・20代）

ワカモノがゆく！ vol.5

土佐文化体験記

高知県内各地で脈々と継承されてきた地域の文化を、ワカモノたちが体験！
今回は、佐川町の「明郷園」で、地元の高校生が紅茶づくり体験に挑戦。

「途絶えさせるわけにはいかない」かつて国内外に流通していた佐川産の紅茶の復活

紅茶の製造が西日本各地で盛んだった昭和30年代、戦後から続く紅茶づくりが高知でも広がり、民間企業の工場もあった佐川町は紅茶の一大産地として知られるようになった。やがて輸入紅茶の関税撤廃などにより紅茶栽培は途絶えてしまうが、かつての茶畑が放棄されずに残っていることを知り、「このまま途絶えさせてはいけない」と立ち上がったのが、今回訪ねた「明郷園（めいきょうえん）」の澤村さん。当時、高知に導入された品種「はつもみじ」と「べにほまれ」をはじめ、現在は6種類ほどの茶葉で紅茶づくりを行っている。文化をつないでいきたいという思いから、体験や大学のインターンを積極的に受け入れているほか、小学校での教育や、佐川高等学校とのブレンド紅茶の製造など、紅茶の魅力発信に尽力している。

佐川町の魅力を知ろうと思って挑戦しました！

体験者（代表）

おはら　みみか
小原 夢々佳さん

佐川町出身。「地域マネジメント部」の次期部長で、佐川町の街歩きガイドとして観光客をもてなしたり、「商い甲子園」で仕入れや接客などを行い、積極的に町内外との関わりを持つ。

佐川町

紅茶

自然豊かで昼夜の寒暖差が大きい風土を生かし、古くから茶の栽培が盛んだった佐川町。戦後に高知県で紅茶づくりが始まると、尾川地区に民間企業の工場も建ち、佐川町は紅茶の一大産地として知られるようになった。佐川町産の茶葉を使った紅茶は国内外に広く流通していた。その当時植樹された品種のひとつ「はつもみじ」は、今では希少品種として佐川町の産品となっている。

問い合わせ先／0889-20-9506
（さかわ観光協会）

1.手揉みを伝授してもらう生徒たち。 2.代表の澤村和弘（さわむらかずひろ）さんと妻のさちさん。 3.300度の釜で素早く茶葉を炒る。 4.自分たちで作った紅茶は格別のおいしさ。澤村さん曰く、良い紅茶はスイーツがよりおいしく感じるのだそう。

自分の手で一から手がけた紅茶 地元の名産を誰かに教えたい

今回紅茶づくりを体験したのは、佐川高等学校の生徒たち。体験は茶摘みから始まり、前日に摘んでしおれさせた茶葉を手揉みし、3時間の発酵、300度の大釜で15分炒る殺青（さっせい）へと続いた。意外と力が必要な場面もあり、「筋トレみたい」と汗をぬぐう姿もあった。発酵を待つ間は、15種類の紅茶を飲み比べ、自分が一番美味しいと思ったものに付箋を貼るなど楽しい時間を過ごした。

体験後、「自分の親にも佐川町の紅茶を教えたい」「地元のお茶が一番好みだった」「これを機にもっと地域について知りたい」などと楽しそうに話す生徒たち。その様子を見守りながら「たくさんの人に佐川で作られるお茶のことを知ってもらい、次世代につなげていけたら」と澤村さんは目を細める。

実は澤村さん、70歳を迎えるまでの残り2年の間に継承者を見つけたいと考えているそう。興味のある方はぜひ門を叩いてほしい。

はみだしコラム ミレービスケットにあう飲み物を知りたい！私は和紅茶がすきです。（東京都・20代）

TOSA SPICE WORLD!

高知の薬味の底力

vol.5

今回は ミョウガ

キラリ、そして「ピリリ」と放つ存在感。高知の食文化に欠かせない、辛くて香り高い「薬味」の数々
歴史、産地、そしてその薬味を使った料理のことをもっと知りたくありませんか？

高知県民の好みを映す薬味界の王様

高知県が生産量・シェア率共に全国1位を誇るミョウガは、まさに高知の薬味文化を象徴する食材。シャキシャキとした食感に加え、鼻を抜ける独特の香りとほのかな辛味が特徴で、香り豊かな食材を好む高知県民にとって、替えが利かない薬味の一つだ。高知の郷土料理で山の幸やこんにゃくなどを寿司のネタに見立てて作られた田舎寿司や、鰹のタタキの薬味などに用いられ、近年は出荷量の増加に伴い全国でも高知のミョウガを楽しめる機会が増えているという。古くから高知に根付く"香る食文化"の魅力を全国に広める役割も果たしている。

栽培方法は門外不出！日本一のミョウガ作り

「ミョウガの栽培方法はトップシークレットなんです」と話すのは、須崎市でミョウガ農家を営む嶋崎さん。実は、高知県内で行われているミョウガ栽培の多くは、高知県独自の栽培方法によるもの。栽培に関する情報は徹底管理され、IoP（※）を活用した最先端のミョウガ栽培が展開されている。「特に、食べた時のみずみずしさは高知県産に勝るものは無い」と自信を持って語る嶋崎さん。農家の方々がプライドを持って栽培に取り組んでいることも、高知のミョウガが日本一である理由のひとつだ。

※IoP（Internet of Plants）施設園芸の生産現場の環境情報に加えて、植物の生育情報や収量、収穫時期や農作業などの情報を「見える化」する取り組み。

ふっくらした丸みと色鮮やかな紅色を帯びた高知県産ミョウガ。夏と秋の収穫シーズンには、鮮度を落とさないよう手早く出荷作業が行われる。

話し手
JA土佐くろしお みょうが部会 副部会長
嶋崎（しまさき） 賀寿也（かずや）さん

昭和55年生まれ、須崎市出身。就農20年のベテランミョウガ農家。国内での消費拡大にも力を入れる。

丁寧な文章で温かみを感じました！（高知県・30代） はみだしコラム

高知で始めた若い感性と文化の兆しを追いかける！

さっとはじまるとさではじめる！

美味しいコーヒーを片手に、つながりが生まれる場所

さらに多くの人に届けるために
コーヒー豆の焙煎に挑戦中！

新しいことに挑戦できる場所 仲間の存在も心強い

「いの町に来て本当によかった」と話す浮木大智さん。自身が愛するコーヒーを旗印に、日曜市への出店や、県内のコーヒー店とコラボイベントを開催するなど、いの町を拠点に多彩なフィールドで活躍している。仁淀川流域には新しいことに挑戦する若者が多く、応援する意味も込めて店内には近隣市町村の地域おこし協力隊が作った商品や作品を並べている。「高知の人はすぐに仲良くなれるし、受け入れてくれる。新しいことを始めやすい環境だと思います」と浮木さん。人と話すことが好きで、会話が弾みすぎるあまり、お代をもらい忘れることもあるという、そんな一面もチャームポイントだ。コーヒー片手に会話が弾み、そこからまた新しいことへつながっていく。そんな可能性に満ちた場所だった。

浮木（うきき） 大智（だいち） さん、彩乃（あやの）さん
@Ukiki to

大智さんは大分県、彩乃さんは高知市出身。2人とも前職は京都の大手コーヒー製造販売会社勤務。令和3年にいの町に移住し、その2年後に「UKIKI COFFEE」をオープン。令和6年まで地域おこし協力隊として商店街の活性化に尽力した。

何かに挑戦する人が多い仁淀川流域
協力し合って活動の原動力に

はみだしコラム とさぶしは、面白い記事がいっぱいあります。（高知県・30代）

つないでつむいで 県史編さん室

過去を未来に引き継ぐための調査を行っています！

高知県史（自治体史）とは？

高知県について伝え残されたさまざまな資料を調査し、本県の歴史を詳細に記したもの。郷土の歴史を知る、大切な手がかりだ。

高知県関係資料を保管する高知資料書庫

3階の高知資料コーナー

県史編さんの強い味方・オーテピア高知図書館

県史編さん室には、ごく簡易な保管庫を除いて資料を所蔵する場所はない。調査担当の職員は、室から徒歩10分ほどの場所にあるオーテピア高知図書館にほぼ毎日通い、資料調査を進めている。

同館が所蔵している高知県関係資料は14万点以上、江戸時代から伝わる旧家の古文書など貴重資料も多数所蔵している。高知県がたどってきた歴史を紐といていく中で、頼りとなる多くの資料がここには収められている。

「過去の貴重資料だけでなく現在の行政などの資料も幅広く収集・保存し、未来に伝えていくのも図書館の大切な役割。県史の取組みとも似ているかもしれません」と同館の渡邊チーフ。廃棄を免れ大切に引き継がれてきた過去の記録を、県史として編み直し未来へ伝えるのが、当室の仕事。頼もしい味方と一緒に県史の編さんは進んでいる。

レファレンス・サービス（調べもの相談）の活用を

同館では、所蔵資料やデータベースを活用して、来館者からの調べものの相談にも対応している。県史編さん室ではＮＨＫの連続テレビ小説「あんぱん」の歴史監修に少し関わったが、その時にも利用したのがこのサービス。劇中での移動に使った交通手段や、ヒロインが勤めた架空の新聞社の雑誌名など当時の世相を反映したものを提案するため、多くのことを調べさせてもらった。よく聞かれるのは先祖調べに関すること。手がかりが少なく簡単ではないが、所蔵している資料の中に名前が見つかることもあるそうだ。

「ここには過去から現在にいたるまでの様々な資料や情報があります。気軽に利用していただきたいです」と司書の中嶋さん。何かを知りたいと思ったとき、スマホを開く前に図書館を訪ねてみてはどうだろうか。

高知資料デスクでのレファレンス対応

第14回　豊永郷民俗資料館

史料が語るもの語

長岡郡大豊町の定福寺境内にある豊永郷民俗資料館では、収集された民具や民俗資料が保存されている。昭和57年に収集民具の内2,595点が「土佐豊永郷及び周辺地域の山村生産用具」として、国の重要有形民俗文化財に指定された。

豊永郷民俗資料館には、農具、養蚕（ようさん）用具、山樵（さんしょう）用具、鍛冶用具等2,595点の指定文化財が展示されている。同館ＨＰによると、山村民具では四国で唯一の指定となっており、特にのこぎりの収集量は多く、中には室町時代に使われていたものと同じ型も収蔵されている。これは日本に現存する6点のうち希少な2点にあたる。館内には、同種類のものが複数点展示されており、それぞれの細かい違いから民具の使用者や地域、時代性による特徴を知ることが出来る。

今年度、高知県史編さん文化財部会が発足し、調査を行っている。令和10年度には、民俗文化財も掲載される文化財資料編の初刊が刊行される予定である。高知県にとって貴重な文化財の記録を残していきたい。

豊永郷民俗資料館（大豊町）

高知県の歴史に触れる

県史特集

受け継がれる暮らしと文化財

今回のテーマは、活用される登録有形文化財。藩政末期の暮らしを残す貴重な建物を舞台に才気あふれる起業家と家族が繋いできたかけがえのない老舗喫茶店の歴史を訪ねた。

この建物が登録有形文化財に認定されたのは平成15年。屋内の畳に使われているのは、土佐ならではの古い寸法体系で、江戸時代末期の暮らしぶりを今に伝える貴重な民家として評価された。

160年もの時を刻む歴史ある建物にゆったりと寛げる喫茶

文化財とは、地域で受け継がれてきた歴史や暮らしの記憶を今に伝えるもの。その中でも「(国指定)登録有形文化財」には、今なお現役で活用されながら保存されている建物が多く、地域に息づく文化を、目に見えるかたちで繋いでいる。田野町でおよそ40年続く老舗「茶房 千福」も、そんな登録有形文化財のひとつ。ここでは、土佐の伝統的な建物構造はもちろん、喫茶を生業としてきた家族の大切な思いも、日々受け継がれている。

お話を聞かせてもらったのは、千福の2代目店主、小笠原さん。「この建物が建築されたのは藩政末期の頃で、今から160年ほど前のものになりますね。当時は田野の郷士が暮らしていたと考えられていますが、実は明確な資料は残されていないんです」という。それでも屋敷には安政2年(1855年)と記載された大きな祈祷札が残されており、柱や梁といった建物の骨組みも、ふすまを開放すれば広間になる間取りも、当時の建築や暮らしの文化を見事に伝えている。

歴史ある建物で祖父の才覚が発揮され愛され続ける喫茶に

「私の祖父・佐野正輝（さのまさてる）が昭和45年頃にこの建物を買い受けまして、そこから10年ほどは、私たち家族の住居だったんです。私が小学生の頃に使っていた自室もあって、今ではその部屋、客席になってるんですよ（笑）」と小笠原さん。正輝さんは、電気屋やガソリンスタンドも営んでいた起業家で、「茶房 千福」のお店づくりも、「照明はこれ、家具はオーダーメイドで、配置はこうで」と、正輝さんの手腕によるものだそう。「初代の店長は私の祖母でした。お店は開店当初から大盛況で、とても忙しそうだった光景を覚えています。当時、私が『進学で県外にでたい』と言ったら、祖父は『将来、この店を継ぐならいいだろう』って。祖父の言葉通りになっていますね」。

「千福」という名称は、喫茶店がある周辺地域の名称でもある。すぐ横には「千福神社」も立っている。

受け継がれるのはこの建物の歴史とそして、この家族の歴史

お店のこれまでを振り返って一番大きな出来事だったのは、「やっぱり祖父が亡くなった時ですよね」と小笠原さん。「『これから誰に指示してもらったらいいんだろう』と途方に暮れましたが、『新しいことよりも、とにかく現状を維持するために、家族で精一杯やろう』と。そんな努力を続けるうちに、どこか緊張がほぐれてきたのかもしれません」。正輝さんが亡くなった後、建物は登録有形文化財に。保存をめぐる課題もある中、小笠原さんは「ただ文化財だからではなく、祖父や家族、それにこの建物で暮らしてきた人たちを思うと、『やっぱり残さなきゃ』って感じるんです。古い建物の維持は大変ですけど、そのためにも喫茶を続けていきたい」と話してくれた。

こちらの一室が、小笠原さんの自室だった場所。一番人気の客席になっている。

店に立つ佐野三花（みはな）さんは、将来の3代目店主（上写真）。和風スイーツなど、新しい名物も生まれており、SNSなどをきっかけに、若者も多く訪れている。

高知県田野町育ち。「茶房 千福」の2代目店主として、お店を切り盛りしている。コーヒーのブレンドや内装など、喫茶店をできるだけ開店当時のまま維持しながら、未来に繋いでいる。

小笠原（おがさわら） 勢津子（せつこ）さん

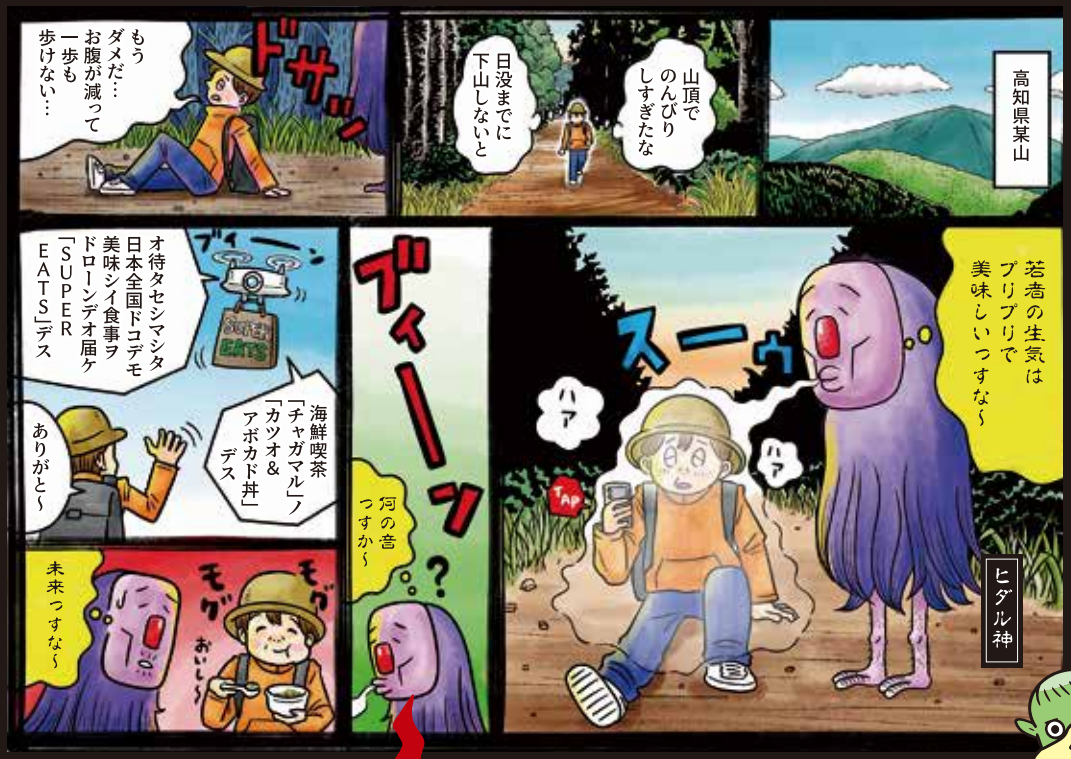
令和高知の妖怪大図鑑

パケペディア

其の六

AM3:00　80%

ヒダル神（ヒダルがみ）



お腹が空き過ぎて体調が悪い…それはヒダル神の仕業かも

山道や峠などで急に激しい空腹に襲われ、冷や汗が出て動けなくなる。このような時、土佐では「ヒダル神に憑かれた」といわれてきた。

「ヒダル神」は、人間に空腹感をもたらす憑き物で、飢えや疲労によって死んでしまい、祀られることのなかった者の魂や、怨霊のようなものだと考えられている。高知県ではヒダリガミ（旧十和村ほか）、ヒダル（旧吾川郡ほか）、クワン（旧土佐山村）、ガキ（旧十川村ほか）など各地でいろいろな呼び名があった。ヒダル神に憑かれると何でも一口食べるとよいとされ、常日頃から弁当は食べつくさずにヒダル神に憑かれた時のために二、三粒残しておいて、憑かれた時に口に入れたらよいといわれていた。また地域によっては、米という字を手のひらに書いて食べる、身につけている物を後方に向けて投げるという説もあった。

山道を歩く時や遠出をする時は、食べ物の備えを十分にしておこう。

協力：高知県立歴史民俗資料館

とさぶしからの贈り物

1

P04 喫茶ノア

小倉トーストのモーニングサービス券 3名様

粒が残るようにじっくり炊いた、こだわりの自家製あんこが美味しさの秘訣。若い世代の客層にも大人気のモーニング。

2

有限会社デポー P05

1000円分のお食事券 10名様

県内のデポー全店で使えるお食事券。おにぎりとトーストがのった「高知のモーニング」など高知らしさを楽しんで。

3

P09 西山珈琲館

500円分のお食事券 5名様

広々とした店内で、ゆっくりと過ごせる「西山珈琲館」。手作りケーキや自慢のスープカレーを味わってみて。

4

喫茶オレンジ P11

ホットケーキ引換券 2名様

店名の焼印が目を引く昔ながらのホットケーキ。小麦の香り、歯切れの良さ、程よい弾力感にこだわっている。

5

JA土佐くろしお ミョウガ

5名様 P20

高知県が生産量全国1位を誇るミョウガ。サラダや味噌汁などいろいろな料理で使ってみて。※1名につき数パックをセットにしてプレゼント

6

QUOカードPay1000円分

5名様

※こちらの商品をご希望の方は、応募時にスマホで受信できるメールアドレスを記載してください

応募締切

令和7年12月20日

クイズとアンケートに答えて読者プレゼントに応募しよう！

クイズ 須崎市の「喫茶みつや」が創業したのはいつ？

❶スマホから右のQRコードを読み込んでwebサイトにアクセス
❷応募フォームより必要事項を明記し、読者プレゼントに応募する

※QRコードが読み込めない場合はLINEアプリから友だち登録していただき、ご応募ください。

とさぶし

※読者プレゼントの応募は「とさぶしwebサイト」もしくは、官製ハガキから応募できます。官製ハガキで応募される場合は①年代②性別③お住まいの都道府県④とさぶしを手に入れた場所⑤とさぶしを知ったきっかけ⑥良かったコーナー（複数回答可）⑦満足度（10段階評価でお願いします）⑧とさぶしを読んで実際に行ってみたい、食べてみたいなど意識変化はありましたか？（はい／いいえ）⑨「はい」の方。その理由を教えてください⑩とさぶしを読んで、実際に冊子掲載店や場所に行ってみたり、商品を購入してみたりしましたか？（はい／いいえ）⑪クイズの答え⑫希望する商品⑬氏名⑭発送先のご住所⑮電話番号⑯メールアドレス（※デジタルギフトご希望の場合）⑰はみだしコラム（※）をご記入の上、下記の宛先まで締切日（令和7年12月20日）必着でお送りください。〒781-0081 高知市北川添10-15 株式会社ほっとこうち

●読者プレゼントの応募は、1人1回とさせていただきます。 ●プレゼントの発表は、商品の発送をもって代えさせていただきます。 ●いただきました個人情報はプレゼントの発送にのみ使用します。
※とさぶし第48号より、各ページ下にコラムの掲載を始めました（今回応募していただいたコラムは第53号に掲載予定です）。とさぶしに関する「感想」や、次回の特集テーマである「高知の輸出」にまつわるエピソードなど（30文字程度）をお寄せください。掲載は抽選となります。（例）毎号楽しく読んでいます。高知のお酒文化をもっと知りたい！（高知県・30代）

A BRAND NEW CHAPTER @KOCHI
TOSABUSHI

とさぶし

https://tosabushi.com

Web リニューアル! 見てちや!

発行
高知県文化生活部文化振興課

〒780-8570 高知市丸ノ内1丁目2番20号（本庁舎5階）
Tel 088-823-9793　Fax 088-823-9296
E-mail 140201@ken.pref.kochi.lg.jp
発行日：令和7年 9月30日（季刊）

企画　とさぶし編集委員会
制作　ほっとこうち

バックナンバーの入手方法・お問い合わせ

高知県文化生活部文化振興課（上記）まで
ご連絡ください。

Facebook、LINE、Instagramでも情報配信中！

Facebook　LINE　Instagram

特集

P02 アサヒルバン喫茶
P04 朝じゃなくてもモーニング
P06 「地」喫茶の一日
P08 高知式 まんがと喫茶
P10 駅近くの「待ち」喫茶
P11 喫茶と常連さん
P12 となり合う昭和の名店
P14 わたしたちの寝る前喫茶

連載

P16 憧れのバトン【新店主×前店主】
P18 土佐文化体験記【紅茶】
P20 高知の薬味の底力【ミョウガ】
P21 さっとはじまる とさではじめる！
P22 つないでつむいで 県史編さん室
P24 県史特集【受け継がれる暮らしと文化財】
P26 バケペディア【ヒダル神】
P27 とさぶしからの贈り物